

地域福祉活動職員の

福岡

ま な こ

社協活動前進のために

No.51 2002年3月発行

福岡県地域福祉活動職員連絡会 まなこ編集委員会

2002年度、学習指導要領の改定に伴って実施される「総合的な学習の

〔報告者〕
稲築町社会福祉協議会 前田浩明

2002年発！福祉教育の行方
「子どもたちに何をどう伝えるのか」
第1分科会

みんなのしゃべり場! 示そう社協の存在感!!

第3回福岡県「社協職員のつどい」報告

平成13年11月17日(土)開催

第3回福岡県「社協職員のつどい」 みんなのしゃべり場 示そう社協の存在感!!



～社協いしかしきらん よかますつくり～

2001.11.17(SAT) CLOVER PLAZA

主催：福岡県地域福祉活動職員連絡会
F+K+K+A 福岡県社会福祉協議会

時間」は、さまざまな体験や地域との交流を通じ、子どもたちの自主性を重んじながら、課題を見つけ、学び、考え、行動する力すなわち「生きる力」を身につけることを目的としています。その「総合的な学習の時間」の中で、福祉について学ぶという分野が設けられることが示され、教育現場では「福祉体験は社協へ」ということで、各社協に連絡が入ることが以前にもまして多くなったようです。しかし、「点字器とアイマスクを貸してください」「車イスを貸してください」「お年寄りにインタビューをさせてください」といったいわゆる行事消化的側面を含んだ依頼が多くなり、「子どもたちの主体性はどこにあるの？」とあらためて「福祉教育とは何か」という問いを社協に投げかける最良の機会となったようです。

この分科会では、「福祉教育の意義を改めて見つめなおし、社協はどのような視点をもって関わっていくべきなのか」ということを大枠のテーマとし、教育現場並びに社協の実践者に発題してもらい、学校、地域、社協が取り組むべき課題を協働作業で整理しました。

発題者①
福岡県ボランティアセンター
運営委員長 古谷信一氏

「総合的な学習の時間」とは、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」をはぐくむことを目指す、新学習指導要領の大きな柱のひとつです。
「生きる力を養う」ということは、学習を通じて子どもたちが成長していく過程を多面的に捉えていくことです。



また、社協と学校は、相互理解をさらに深める必要があります。双方の事情を十分に理解した上で、協働作業として福祉教育に取り組みたいと、お互いの持ち味が発揮できません。同じテーブルで論議をしていく必要性を感じています。

発題者②

田川市立金川小学校

教諭 熊谷正敏 氏

つまり、結果がすべてという学習ではなく、課題を発見したり、行き詰まったり、右往左往しながら仲間と共に学習するということです。

この「総合的な学習の時間」の導入については、「学校教育の文化的体質を根本から見直す絶好の機会」と、その役割を期待する一方で、基礎学力の低下が深刻な状況であるという世論の中にあって、さらに基礎科目の時間数が削減されるとなると、「いつ国語や算数を教えるのか」と戸惑いを隠せないという二局化された実態があります。しかし、単に「総合的な学習の時間」への対応という問題を越えて、地域の変化のもとで学校の役割の「問い直し」が迫られているように思います。

総合的な学習の時間は、「学ぶこと」の意味を学ぶ時間であると思います。

教員が敷いたレールに乗ってなんとなく学ぶのではなく、子どもたちが自分で考えながら、いろんな手法（本やインターネットで調べたり、地域の人と聞いたり）を駆使しながら学んでいく学習です。また、地域社会とのかかわりの中で評価される学習プログラムが大切です。「自分たちが住んでいる地域にもこんな人が暮らしているんだあ」という出会いや発見は、地域のことを知る上でとても大事なことです。

また、総合的な学習の時間を進めるうえで、社協のバックアップは必要です。社協と学校が協力して福祉教育を実践できるよう、協力体制づくりが求められると思います。

発題者③

筑後市社会福祉協議会

総務福祉係長 中山陽一 氏

「総合的な学習」の現場で、先生もその意義を自問しながら、試行錯誤しているというのが現状。しかし、「障害者の生活を理解する」と称し、「車イス体験」や「アイマスク体験」など安易な内容に終始していないか。教育の突破口として、子どもたちに福祉をどう伝えるかということも、社協のワーカーや当事者、ボランティアとのやりとりを通じて改めて問い直してほしい。

要。

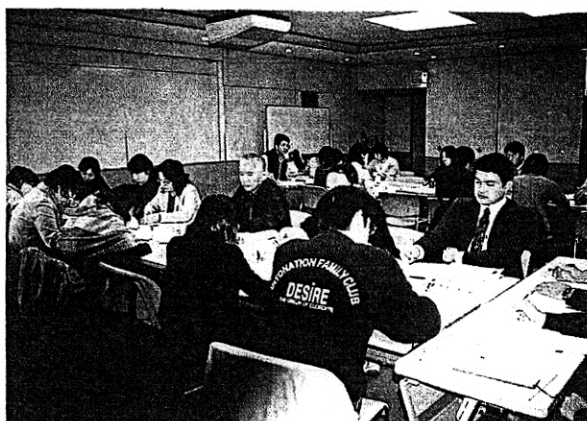
△終わりに▽
人は地域で暮らすことによって、慣習や秩序、道徳など様々なことを学びながら成長する。すなわち「生きる力」は地域で育まれることになる。改めて福祉教育について考えると、それは学校が担うものでもなく、社協が担うものでもなく、地域こそが担えるものではないだろうか。

各現場からの意見を参考に、午後からは、「社協はどのような視点を持つべきか」という仮説を立てるため、2つのグループに分かれて様々な意見を出し合った。

話し合いの結果、以下のような点に集約することができた。

- ・ 学校との連携体制を確立させる。
- （福祉教育推進連絡会などを設置し、常時情報交換を行う）
- ・ 先生たちにも、キャップ・ハンディを積極的に体験してもらおう。
- ・ 体験学習はあくまでも学習の一部であるので、その後のフォローをしっかり計画する。

・ ワーカーとして、福祉教育を進める活動を地域のボランティアや当事者を巻き込みながら展開していくことが重





第2分科会

利用者支援の新たなステージ
「地域福祉権利擁護事業」がやってきた
〜となる社協の日常業務?〜
今日は一から徹底討論〜

〔報告者〕

津屋崎町社会福祉協議会 森 直人

第2分科会では、制度、実施方法、社協が関わる意義等、いまいち未消化(?)な地域福祉権利擁護事業について基礎から進めました。

発題者として、福岡県地域福祉権利擁護センター 古賀繁雄氏、広島県三原市社会福祉協議会 吉原隆氏を迎え、古賀氏に制度の仕組みの基礎的な内容、吉原氏には「社協と福祉権利擁護事業の関わり」について話を伺いました。

その講演の中で、介護保険制度の実施や社会福祉基礎構造改革により、福祉サービスの利用が措置制度から自ら選択・契約する利用制度へと変わる中で利用者保護制度として創設されたが、課題として、

- ・利用者への事業の周知が不十分である。
- ・事業の対象者(痴呆性高齢者、知的障害者、精神障害者など)判断能力が不十分な方)でない「判断能力のない人」、また「単身で判断能力のある寝たきりの高齢者」の対応をどうするか。そのためにも、地域福祉権利擁護事業と成年後見制度の間を補う制度が必要ではないか。
- ・現在、事業の一部を基幹的社協に委託しているが将来的(5年、10年先)には、各市町村社協で行うことが望ましい。ただ財政面から行政の理解も必要である。
- ・金銭管理は、まだ民生委員・ヘルパーの善意による管理が多く、トラブルが多発している。そのため、本事業の利用へ早急に移行すべきだ。

等のコメントをいただきました。



午後の部では、地域福祉権利擁護事業に関する命題について、クジにより賛成派、反対派、また判定者に分かれて、論戦を繰り広げました。はじめに賛成、反対それぞれ意見をまとめてもらい、各命題の担当がロッキーのテーマが流れる中、ハチマキをして登場、蝶ネクタイをしたレフリー役がゴングを鳴らしバトルの開始です。

命題の担当が、3分間の持ち時間で賛成、反対の意見を展開、相手の意見を聞いて1分間の反論、それを判定者がどちらに説得力があったか自分の意見を添えて勝敗を判定します。

これが以外(?)異様(?)に盛り上がりました。担当は、判定者に自分

達の意見が正しいと納得させようと小泉首相ばりの身振り、手振り、熱弁を振るい、また反論をします。それを判定者は傾聴し判定する。その様子に笑いや拍手喝采。(隣の分科会にご迷惑をおかけしました。)経験年数の若い方から局長レベルの方等、様々な立場の人が遠慮なく語り合えた時間でした。

最後に、地域福祉権利擁護事業は担当だけでなく、社協職員全体で理解し、取り組む必要がある。また行政、民生委員等との連携をとりながらすすめていくことが大切である。

と、まとめられました。

ちなみにこれが、命題5項目です。あなたも賛成、反対の立場で考えてみませんか。

- 一、福祉サービス利用援助事業は、社会福祉協議会が絶対すべきである。
- 一、生活支援員は、積極的に社協職員が行うべきである。
- 一、地域福祉権利擁護事業は、基幹型社協、都道府県社協が中心である。
- 一、地域福祉権利擁護事業は、判断能力不十分の痴呆性高齢者、知的障害者、精神障害者に限定すべきである。
- 一、地域福祉権利擁護事業は、在宅だけで十分である。



第3分科会
みんなでつくろう!
「社協」コミュニティーワーカー10か条

〔報告者〕
 福岡市社会福祉協議会 住田 美千代

発題者

水俣市社会福祉協議会
 地域福祉活動コーディネーター
 田代久子 氏

福岡市早良区

早良校区社会福祉協議会会長 後藤光敏 氏
 助言者
 築城町社会福祉協議会
 福祉活動専門委員 佐々木真司 氏

この分科会は、個人ワークやグループワークを通じて、参加者全員で社協コミュニティーワーカーとはこういうものであるとしたいという、「私たちの社協コミュニティーワーカー10か条」をつくりだしていく内容であった。

まずワークショップに入る前に、発題者の方からそれぞれの立場の10か条を披露。田代さんからは、社協コーディネーターとしての立場から、また後藤さんからは地域の立場から、社協職



員に対して「こうあってほしい」10か条を発表していただいた。その後司会から、事前に調査していた、大学講師等社協外部の方からの10か条を発表した。

数時間のワークショップが終了し、参加者や講師の意見をいたしながら、参加者全員で今回の分科会の10か条をつくりあげた。

意見交換の中で、「最終的に出来たか10か条が、どれも大切ではないか」という意見が多く、10か条に集約するには相当の時間を要した。また、他の多数意見としては、「記録の重要性」「自己の心身の健康管理」「人のネットワークの重要性」等が挙がっていた。

しかし、社協外部から意見を聞くことで、より相手の立場に立ったものができたのではないだろうか。
 最後に、発題者の方から一言ずつコメントをいただき、アドバイザーの佐々木氏からも10か条を披露していただいた。

今回できあがった「私たちの社協コミュニティーワーカー10か条」報告することで、他の分科会に参加された皆さんの財産にしたいだけだと思います。紙面に余裕があれば全員の10か条を掲載したいところだが、それが難しいため、興味のある方はぜひ第3分科会のスタッフにお問い合わせ願いたい。

わたしたちの「社協コミュニティーワーカー10か条」

平成十三年十一月十七日(土)

第3回「社協職員のとことい」

第3分科会参加一同

第一条

記録を怠らない。

第二条

心身ともに健康であり、笑顔で対応しよう。

第三条

地域は社協の「いのち」。地域に足を運ぼう。

第四条

職員との連携・協力をとるとともに、様々な人脈を生かさそう。

第五条

情報を収集するとともに、有効的に活用できる眼を持つよう。

第六条

全てにおいて現状に満足せず、将来を見据えて行動しよう。

第七条

嫌いな人をつくらない。

第八条

ネットワーク・サロンを積極的に広げよう。

第九条

専門職としての専門性を磨き、常に学ぶ姿勢を持つよう。

第十条

「本場に住民の立場にたって行動しているか」を、常に考えよう。



第4分科会

太陽系・福祉系・いやし系

〔報告者〕

田主丸町社会福祉協議会 坂井潔子

第4分科会では、「生きがいデイサービス、ふれあいいきいきサロンの実践現場で活用できる福祉レクリエーションおよびセラピューティックケア・ハンドケアの実技講座」ということで、実際に医療や福祉の現場でご活躍されている先生方を講師に迎え、参加者全員に体験をしていただくという分科会を実施しました。

午前中は、セラピューティックケアサービスクラス・ネットワーク福岡代表の秋吉美千代先生のご指導のもと、セラピューティックケア・ハンドケアを体験しました。

「セラピューティックケア」とは、英国赤十字社のボランティア活動として1997年より始められたもので、ハンドケア、首・肩のマッサージからなっています。ツボマッサージ法とは大きく異なり、手、肩、背中をリンパの流れに沿って「エフルラージュ」と「ニーディング」という手技で、筋肉帯に求心性（心臓に向かって）のマッ

サージをゆっくりと行います。直接身体に触れることにより、好意や親近感が伝わり、癒しの効果が大きいとのこととです。このケアを、二人一組になって体験しました。マッサージの方法を学ぶことはもちろん、自分がマッサージをされることによって、手の平から伝えあう温もりによる癒し効果や、身体が軽くなった等のマッサージ効果も実感することができたと思います。

午後は、特別養護老人ホーム「奈多創生園」訓練指導員の山崎朋枝先生のご指導のもと、福祉現場での福祉レクリエーションを体験しました。

まずは、福祉レクリエーションを実施するにあたって、レクの押し付けにならないよう利用者の生活歴、職歴、



趣味などの情報を収集し、利用者本位にプログラムを立てなければならぬ

（そのためには、多くのレク財を知る必要がある）ことや、作品としてレベルが高いもの、あるいはそう思えるものを選ぶこと、支援者はなるべくプロであること、リハビリ効果にレクリエーションの遊び心と楽しさを味付けして行うこと、具体的な形で目標（発表会、作品展等）を設定すること等の大切なことを教えていただきました。また、相手に伝えるためには普段のままではなく、顔を変える（表情、演技力）必要があることや、プラスの言葉かけ等の演出技術もご指導していただきました。

続いて、実際に「リラクゼーション体操」「リリアン編みマフラー」「パタパタ鶴」「ケアピクス（ケア＋エアロビックス）の造語」「開運招き猫音頭」等の福祉レクリエーションを体験しました。山崎先生のご指導のもと、参加者全員が心から楽しむことができたのではないかと思います。

以上、参加された方々は2つの体験を楽しむとともに、それぞれを実施するにあたってどのような姿勢や態度を持つ必要があるのか、利用者の体と心の動きをいかにとらえていかなければならないのか等を、体験の中から学び取られたことと思います。また、それぞれの地域の実践現場で役立ててくれることだと思います。

第5分科会

〔社協▽介護保険〕

「変わった？変わらぬ！」

社協・地域・サービス・・・

これからどうなるの??

〔報告者〕

星野村社会福祉協議会 梶原重成

第5分科会では、メインテーマ「社協▽介護保険」、サブテーマ「変わった？変わらぬ！社協・地域・サービス」ということで、介護保険制度が発足して1年半経過した今をそれぞれの立場から語っていただきました。

参加者約30名で、ヘルパー・職員はもとより、事務局長・ケアマネ・地域職員と各職種より平均的な数の参加がありました。

午前中3人の発題者と助言者によるディスカッション、午後それを受けての分科会を行いました。

発題者①

八女市社会福祉協議会

事務局長 中野孝人氏

八女市社協の事務局レベルでは、いちはやく介護保険施行後に備えたシミ

ユレーションを実施され準備万端でしたが、結局介護保険事業から撤退されました。理由は理事会での否決です。現在は八女市介護保険連絡協議会を設立し、いわゆる民間事業者育成の立場をとられています。

中野氏が元々経営論に詳しいことは周知のとおりですが、それがゆえに①社協の組織形態が企業としての力を発揮できにくいこと（理事の責任性や労使関係が曖昧な点）②社協が持っている公益性の中で、お役所的な一面が社協の発展性や開拓性を阻害していることを指摘され、そして結果的に③住民を守ることに組織を守ることを優先している。

発題者②

春日市社会福祉協議会

ヘルパー主任 城田博敬氏

城田氏は、さすが事業の春日市の社協マンらしく積極的に在宅福祉事業に邁進されている姿が伝わりました。

城田氏は現場主任の立場から①ヘルパーの資質向上の必要性（採算性重視のため急作りヘルパーの多用で、専門性が失われつつあること）②時間から時間までという多忙さがヘルパーの研修不足・孤立化・業務評価をする時間の減少、引いては利用者側から専門性を感じてもらえないという悩みがあること③利用者のニーズを引き出すヘル

パーの力量の必要性④理念と継続性が利用者を引きつけることなどを語って頂きました。

発題者③

NPO法人北九州あいの会

代表 石井カズエ氏

石井氏は、十年前に北九州市には市民福祉活動が無いことを憂い、会員制による市民組織「あいの会」を発足させました。今では助け合い活動・ケアプラン・デイサービス事業で年収1億円以上のNPO法人です。彼女の語りには熱っぽく、自分の理念についてであれば一日中も語れそうな感じでした。彼女の目指すのは「地域で自立して生き、自立して死ぬ」ということです。



彼女の社協観は、①民間人から見ればお役所の人たちと同じ様に見える②居宅介護事業者としてみれば知名度も信用も有り、経験も持っていて、NPO法人や民間事業者からみれば羨ましい限りで、介護保険事業から撤退するのはおかしいということでした。

分散会では色々な意見が出たので多くを書き得ませんが、分散会報告の中で出た2つの意見（言葉）が印象的であったので報告したい。一つは「社協は民間で出来ないことを、もう一つは「社協は民間性を発揮して、」という意見でした。もちろん別々の人が違った視点で社協をとらえたときの意見なのですが、「この二つの意見が並んだ文章を外部の人がもし見たら、社協をどう理解するのだろうか？」とつい考えてしまいました。

最後に次の助言をいただき、第5分科会を閉会しました。

助言者

福岡県社会福祉協議会

地域課 大鶴啓行氏

介護保険の契約型利用方式となり、サービスが市場化されたことよって生じた事業者間の競争は必ずしも「サービスの質の向上にはつながっていない」といわれています。（切り売り介護や駆け足介護が報告されている）この様な時節に社協は地域の組織化やVO育成など、いわゆる社協の本来の機能



にこそ力を注ぐべきだという意見もあるが、利用者にとっては、「今すぐ何とかしてくれるサービスや、生活を支える活動」が求められることも事実であり、多機能な社協がその特性を生かす方法を考えなければならぬと思います。

どこの社協におじゃましても、多忙で各部門精一杯がんばっていらっしやるが、忙しさの積み上げがいつの間にか組織としての「力」を分散してしまっているようにも感じます。みなさん一人ひとりの目標が同じ方向を向いているのでしょうか。「我が町の課題」、「我が社協の課題」、「私の仕事かどの様に地域とつながっているのか」、「みんな目標課題を共有化できているか」職場内全員で語り合う時間をつくって



「自立支援を行う在宅福祉サービスは・・・」という目標と「施設入所待機者急増」、「老人医療費高騰」という現実との矛盾を私の仕事を通してどう向き合わなければならないのか? 考えていただきたいし、社協の事業がもたらす効果としての数値的目標や評価もこれからは重要になると考えます。

第3回 福岡県
「社協職員のつどい」
を終えて・・・

実行委員長

八女市社会福祉協議会 水町芳博

「絶えることなく発生する地域の福祉課題に対して社協がやっていることは、焼け石に水をかけるようなもので、抜本的な解決にはならないと言われることがあります。でも、大量の水をかけて冷やすと石は割れてしまいます。社協の地域福祉活動は石を割るようなこととはなく、根気強く一步一步、課題の解決に向けて前進していく、そういうものではないでしょうか。また、そういう活動を続けていけるからこそ社協の存在意義があるのでないでしょうか。」今回のつどいの副実行委員長を務めていただいた福岡市東区社協の松尾林さんが、閉会のあいさつの中でこう語られました。(みんなのしゃべり場! 示そう社協の存在感!! 社協にしかしきらんよかまちづくり) というスローガンにピッタリのことばではないかと私は思いました。

また、それぞれの分科会では、その運営を担当した各実行委員のアイデアが生かされたこともあって、それぞれ

に活発な意見交換が行われていました。私はそのなかで、若い方々の積極的な姿勢に感銘をおぼえました。

このつどいを通じて社協職員としての活力と勇気をもたらしたのは自分だけではなかったと私は思っております。

次回のつどいも意義深いものにしていきたいと考えております。そのためには皆様の力が必要です。ご協力をお願いします。

フリートーク

- | | |
|------------|---------|
| 宇美町社会福祉協議会 | 岸川 妙子 氏 |
| 水巻町社会福祉協議会 | 藤田 昌俊 氏 |
| 三橋町社会福祉協議会 | 津留 雅秀 氏 |
| 三輪町社会福祉協議会 | 栗野 栞 氏 |

やさしさに出会う旅
宇美町社会福祉協議会
岸川 妙子

私は社協に就職して以来、夏期の特休を使って、毎年一人で旅行に出掛けます。特に何かをするためではなく、その時その時に興味を持ったところへとふらりと出掛けるのが好きです。そのため毎年、出掛ける直前まで泊まる場所はどのようにしよう? という交通手段で行こうかと計画が立っていないことの方が多く、慌ただしく出掛けます。

昨年は特に夏風邪を引き体調を崩していたため、泊まるホテル・交通手段を考え始めたのは旅行に行く十日程前のことでした。行き先は京都、目的は世界遺産に指定された寺院などを巡ること、ここまではとりあえず決まっていた。ホテルも何とか決まり、問題は交通手段。とにかく目標はお金をかけずに、時間を有効に使っての移動。JRの時刻表を眺めながら、その条件にあう移動手段を探し、ようやく決まったのは夏休みの期間中博多・京都間を走る夜行の快速列車でした。出発日がお盆にかかり、残念ながら指定席はとることはできませんでした。とにかく座ればいいと思いつつ駅へ向かいましたが、そんな甘い考えは通用する

筈がなく、駅のプラットホームは自由席へ乗るための長蛇の列、一瞬我が目を疑いました。とりあえず京都に着けばいい、覚悟を決め列車に乗り込んだものの、案の定座ることは出来ず約10時間程を過ごすこととなりました。大きなリュックと荷物をもった女の子の一人旅。「家出でもしてきたんじゃないのかな」と思われていたのではないのでしょうか。岡山に近づいた時、私の肩をたたく人がいました。「岡山で降りるから、ここに座りなさい。」二人連れの中年の男性でした。偶然近くにいた私に声を掛けてくれたのだと思いますが、思いがけないとでもありがたい言葉、お礼を言い、席に着くと、その男性は私の荷物を網棚にのせてくれ、列車を後にしていきます。その男性の顔をもう思い出すことは出来ませんが、その優しい言葉と行動を私は決して忘れることはないでしょう。博多駅の長蛇の列を見た時から始まったちよつと憂鬱な旅も、優しい旅先での出会いにより楽しい旅となりました。

京都では、様々な場所を歩き、色々な物にふれました。その中であるお寺に貼ってあった一枚の紙、それに書かれていた文字を今でもなぜか覚えてます。「子供叱るな来た道だ、年寄り笑うな行く道だ。」考えてみれば、何の変哲もない当たり前のことを表した言葉ですが、私はこの言葉に色々と考えさせられました。過去・現在・未来という時間軸の上で生活しているながら、つ

い「今」だけを見つめてしまいがちになることを戒められているようにも思いました。決して子供を叱ってはいけない、絶対にお年寄りを笑ってはいけないということではなく、「自分もやってきたことでしょうか、そんなに偉そうに叱れるの?」とそして「あなたはいずれは年をとり、同じようなことをするんでしょ」とそう問い掛けられているように感じました。そう感じるのは私だけでしょうか?子供を可愛がり、お年寄りを敬いなさい、と言っているのかもしれない。来た道を戻り子供にかえることはできませんが、仕事上たくさんのお年寄りと出会うことができます。少し先の未来に向けて、たくさんのお手本を前に、優しくかわいなおばあちゃんを目指して頑張っていきたいなと思いました。

昨年の京都への旅は、人とのよい出会いに始まり、古きよき街を歩くことにより、色々なことを考えさせられる旅でした。さて、今年はどこに旅行に行こうかと、そろそろ考えはじめているところです。



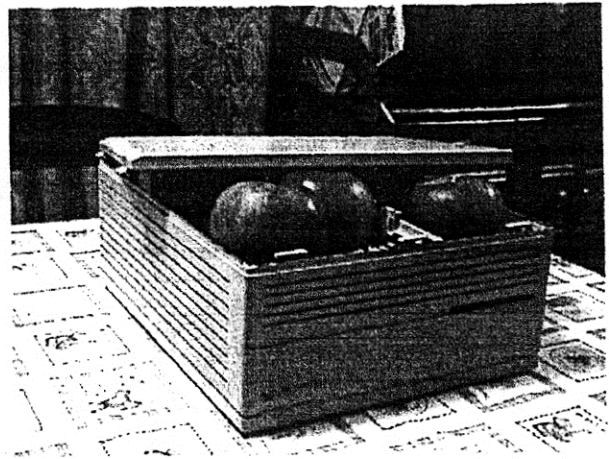
「あなたに来ると私はいつも(手術後の経過が悪いのではないかと心配して)ドキドキします。なるべく驚かせないでください」と笑いながら医師(せいせい)が話しかけてきます。そうそう、手術の前には、「私は、名医でもヤブでもありませんが、スタンダードな腕をしていますが、任せてください」と言われ、その後でいろいろ説明してもらい、安心して手術をうけたように思います。そのせいも、信頼できるホームドクターかなと勝手に思いこんで整形外科にかかるときは、その病院へいくようにしています。

これに似たようなことで、私の場合、一度「いいな」と思うと食べ物、店、もの(道具)など執着してしまうことがあります。パソコンもその一つです。みなさんは、職場や家庭で、パソコンを使っていることと思います。ほとんどの人がWindows機ではないでしょうか。私は、職場ではWindowsも使いますが家庭では、Macを使っています。Windowsは、OSが頻繁にかわり、最近のMEとかXPとか少し触ってみました、98くらいのバージョンの方が扱いやすかったんじゃないのみたいな、気がしています。IT講習会に参加した人が、新しくパソコンを買ってわからないので教えてくださいますと来られても、「新しいOSの機能については、私もわかりません」と答えるのが関の山です。また、各社とも頻繁に機種を変更、添付ソフトはオンパレード、どれがいいのかわからない。ただ目移りするだけといった感じですが。景気のいい人はよく買い換えているようですが...

現在我が家にはMacが4台あります、使っているのは、古いデスクトップ型と、ノート型と、借り物のiMacです。(もう一台は、改造用にもらった物で周辺機器を乗せる台になっています。)古い機種でも用途がはっきりしていれば、それなりに十分活用できます。あるMac愛好家が「Macは新しい機種が出て欲しいなと思ったとき、買い換えるのではなく、買い足すんですよ」と言っていました。その気持ちもわかります。古いMacは、使えなくてもインテリアとして置いておきたいと思う物が結構あります。

林檎かわいや
水巻町社会福祉協議会

藤田昌俊



マシン自体の話になってしまいました。〇〇も大変使いやすいように思います。初めて使った時には、目から鱗が落ちる気持ちでした。ある意味で、直感で触って使えたように思います。結構今でも、これでいいんじゃないかみたいな気持ちで使っていることは多いのですが・・・。

現代の目まぐるしく動く社会の中で、時代の流れに惑わされず、とことん使い込んでいける、そんなもの(道具)に会えたことを大変嬉しく思っています。

後ろの方で、時代の流れに流されず、しっかり仕事しろと言っています。そうですね、反省しています。

※Apple社のMacintoshを使っている人は少ないようです、困ったことがあったらお互いに相談しましょう。
ご連絡お待ちしております。メールアドレス mifufu@mac.com

2001年を振り返って… 随想
三橋町社会福祉協議会 津留雅秀

2001年は、どれだけの多くの人が明るく穏やかな世紀になることを祈りつつ、新年を迎えたことだろう。ところが、新世紀への人々の期待と願望は、もろく崩れた。何ととっても、昨年一番の衝撃的な事件はアメリカ同時多発テロが発生したことである。民間機をハイジャックし、乗客もろとも超高層ビルに激突する。また、アメリカ国防総省もそのターゲットとなり、この事件は世界を震撼させた。私は、貿易センタービルに民間旅客機が激突するシーンのニュース映像を見たとき、まるで、アメリカ映画のスペクタクル場面でも見ているかのように思えた。このニューヨークで撮影された悲劇的なテロ集団の挑戦は、新しい世紀の脅威の形をあらわにし、人々を恐怖のどん底に陥れた。首謀者とその政権に対する国際的軍事行動が展開された。この同時テロは、人間の尊厳の根幹にか

かわる事件だった。貿易センター内の犠牲者には、日本人も含まれていた。世界経済の中核であるニューヨークでの事件は、単にアメリカ人だけではなく、多様な国々の犠牲者をだした。そして、この事件の影響は、アメリカ国内経済や国外経済へも及んだ。

もう一つのテロは、いわゆる白い粉によるバイオテロである。白い粉を入れた封書が、アメリカ議会やマスコミ関係者などの手元に送られた。5人の犠牲者の中には、接触経路が特定できない90代の老夫婦も含まれていたという。何とも相手の顔が見えない恐ろしい事件である。

このアメリカの一大事件には及ばないが、日本でも、大阪の小学校児童虐殺事件は、身近なところにおきた信じがたい痛ましい事件であった。一人の心の病がおこした事件で片付けられたらたまらないと、誰しもが思うだろう。安全であるはずの学校内でおきたことへの社会の不安は、計り知れないものがある。事故ではなく、事件だけに、人間の愚かな行動が残念でたまらない。

日本国内では長らく景気低迷のなかで、将来不安はますます募るばかり。そんななかで、面白い話題を提供してくれたのは、スポーツ界の快挙が相次いだことだ。世界的には、男子プロゴルフで、タイガー・ウッズ選手がマスターズトーナメントで勝利し史上初めてメジャー大会四連勝を達成した。アメリカ大リーグでは、ジャイアンツの

バリー・ボンズ外野手が73本の本塁打を放って今期引退したマグワイア選手の年間最多記録を塗り替えた。日本人選手も負けてはいない。何ととってもシアトル・マリナーズの佐々木投手とイチロー外野手の活躍は目を見張るものがあった。なかでもイチロー外野手の活躍は、日本人のみならず、アメリカ人のファンをも魅了した。私の応援する日本のプロ野球軍団(S・L)は、残念ながら優勝をのがした。しかし、イチロー選手の場合は、格別で、この球団を応援しようと、本人の活躍が気になるのは、私だけではない。

スポーツ界の明るさに負けないよう、今年こそは日本を含め、世界の社会・経済に光がさすように望みたい。世紀は、人類が20世紀に残した課題にどう臨んでいくかが問われている。紛争や環境破壊を乗り越え、国際的融和を築き上げて、多様な人々を認め合い、個人の尊厳が確立される社会づくりにお互いがさらに努力していかなければならない。

ニューヨークの一日も早い復興と、犠牲者の家族の心の傷が、少しでも癒えることを祈りたい。



「私の喜びと生きがい」
三輪町社会福祉協議会

栗野 横 氏

ふりかえりますと、あつとゆうまに
本年三月退職を迎えることになりました。

私のホームヘルパー歴は十二年、さ
らに平成十年一月一日から地域福祉活
動専門員となりました。

今までは地域のお年寄りや、障害者
の方のお世話で週二〜三回訪問して参
りましたが、専門員を命ぜられた時は
何だか絆が切れた様な感じがしてショ
ックでした。

お年寄りからは「ヘルパーをやめて
も時々きてよね」と胸をうつような言
葉が出た。

「うん時々来るよ！元気にしとってね」
と私は答えた。しかし専門員になつて
みると、馴れない仕事で無我夢中でし
た。新しい仕事で一生懸命に動き回り、
お年寄りや障害者の方々に逢いに行く
ことはできなかつた。

両筑の地域福祉活動専門員の研修に
はつとめて出席し、皆さんの仲間に入
りいろんなアドバイスを受けながら多
くの事を学びました。

今日、高齢者社会となり、お年寄り
の問題に取組んでいます。これは何十
年か後、若い世代も直面する事であり
ますし、若い人自身の問題ということ

で長期を見すえての活動と思っていま
す。

福祉の仕事は、先駆的であり生き生
きとフアイトをもって実践し、住民の
みなさんからの信頼を得た時、何もの
にも替えられない充実感、さらに明日
への頑張りにと変わっていました。

自分らしく、人間らしく働ける事に
感謝し「させてもらっている」という
心を忘れず、喜びと生きがいへのサポ
ートが出来ればと願っています。

平成十二年度から介護保険が始まり、
社協職員も慌ただしく事業にとりくみ
ました。

お互い緊張感が高まり、大幅なヘル
パー増員や早急な制度の充実と共に事
業体制の確立をめざし、様々な取組み
が進むなか、不安と焦燥で胸いっぱい
の心境でした。

又、社協の新しい事業として、高齢
者を対象に地域の公民館を利用した「ミ
ニデイサービス」を実践する事になり
ました。平成八年頃から大刀洗町社協
や、杷木町社協、浮羽町社協などのミ
ニデイサービスの状況を視察し、その
アドバイスを受け漸く平成十三年度モ
デル地区として三区を予定して七月に
一区から立ち上げ現在八地区となり参
加者も増え盛り上がりを見せるようにな
りました。

やれやれと一息つくところに、この
度は「県南地区ボランティアのつどい」
を三輪町で開催することとなり、私の
最後の役割というか、大きな行事が舞

込み一瞬目の前が真っ暗になるほど戸
惑いました。

どういう準備体制をとったらよいの
かいろいろ考えました。平成12年度は
三輪町で開催されましたので、その県
南地区実行委員会に、石川事務局長と
一緒に参加し勉強させて頂きました。

地元として計画を立てるにあたって
は、県南地区実行委員、町の実行委員、
準備委員の人達と一緒に進めて
参りました。

県南地区会長中村氏、虹の会会長竹
中圭子氏、浮羽町社協國武氏等、多く
の方々のアドバイスを受けながら、計
画はどうか山を越しました。

これもひとえ皆様のお陰です、ご協
力に感謝を申し上げるばかりです。

私の人生を振り返ってみますと、多
くの方々と出会い、又触れあいができ
素晴らしいものであったと思っていま
す。

地域福祉活動専門員の人達との出会
いから始まり、ブロック研修、県社協
での研修、一泊研修での交流等、短い
四年間でしたが、忘れることができな
い多くの思い出が心に刻まれ、嬉しく
思っています。

私も退職後は、今までお世話になつ
た住民の皆さんに少しでも役に立ちた
いとの思いから、町社協へ登録されて
いる「ボランティア」の仲間に入り活
動しようと思っています。

それが「喜びと生きがい」として老
後を楽しく生きて行く事だと思つてお

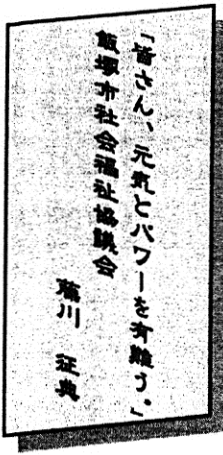
ります。

両筑社会福祉協議会の職員の皆さん、
お体に十分注意しながらご活躍されま
すことをお祈りしまして、私のお礼の
言葉といたします。ありがとうございます
ました。



第 9 回 全国社協職員のつどいに行ってきた (報告)

期 日 / 平成 14 年 2 月 9 日 (土)
会 場 / 大阪府社会福社会館 他



大阪まで行くなら何か必ず持って帰ってこなければと、思いを胸に秘め今回はじめて関コミ主催の「全国社協のつどい」参加させて頂きました。とにかく、関コミに行ってきたを見て

んないと言う社協先輩方の言葉の後押しと共に今回参加した「全国社協のつどい」では、自分にとって元気とパワーの源に出会えた事と、あらためて、自分は社協ワーカーなんだと再確認させられる「全国社協職員のつどい」でもありました。また、一つ一つの計画内容等にしても初めて見る研修ばかり、形式にとられない色々な研修方法のあり方(何かを求める者にしか与えない自由さや、優しさ)、自由奔放的な考え、アイデアや発想には、驚きと感動を覚えました。

そして、今日的な福祉課題への視点にも、とにかく、社協ワーカーとして考え学べるものが沢山あった「つどい」だったと感じています。

今回の「全国社協職員のつどい」では「地域福祉の時代に社協が描く福祉コミュニティの姿とは」と題し、各分科会、ワーカー、S LIVE トークが行われ、その各分科会での報告は、少し話が長くなりそうなので、他の福岡県内の参加された社協ワーカーさんに任せることにして、LIVE トークのお話をさせて頂きます。

このLIVE トークでは、各分科会に参加された方々一人一人にその感想を一文で紙に書いてもらい、その言葉の意味を本人の説明してもらおう企画で、(少しお酒がはいった状態で)会場も居酒屋風にアレンジした、トークショウの始まりである、酒も入っているせいか本音の意見、トークが展開され



た。

例えば「涙」「風」「望」「夢」等々と書かれた方々(すべての説明には、社協、福祉、住民と言った熱意が感じられた。)の熱心な説明が次々と始まり、「涙」と書かれた社協ワーカーの説明では、涙、涙の社協マン生活、涙はあったがその後には、喜びもあったと熱烈に説明をするワーカーもいれば、アルコールのせいとか、完全に頭の中はパニック状態の中で自分の書いた一文字とは全然違った話しを、顔に汗をだし一生懸命説明しているワーカーの熱弁に会場では笑いが耐えなかつたが、でも自分も、そして会場の皆さんも、その社協ワーカーが伝えたい意味が手にとるように理解出来ているようで、な

ぜか自分もうれしくなった。
半分出来上がり状態でのLIVE トークも終わり次は交流会です。

交流会では、運良く関西社協コミュニティワーカー協会会長山田早苗さんのお話を聞くことが出来た。まずはありきたりな挨拶から始まり、次に「全国社協職員のつどい」方向性や趣旨について話しを聞くことが出来ました。山田さんいわく、「全国社協職員のつどい」は、全国社協職員ワーカー皆さんの元気のみなものです。全国の社協ワーカー一人一人の思いを語り合い、学び合い、連携し、一つの意思を高め幅広いネットワークを作って行けたら、どんなにすばらしいでしょうと述べられていました。

社協ワーカーの思い、考えは、みな同じ、一人で悩まずみんなで考え語り合える場こそ今からの社協は必要なんですと言われた言葉には、私も共感と感動を覚えました。

この奥深い言葉の意味の中に、本年度実施した「福岡県社協職員のつどい」対し自分自身、そしてワーカーとしてこれだけの熱意の元にどれだけ自分が取組みが出来たか、関わったか、ただやればよいと言った曖昧な気持ちで取り組まなかつたらどうかと、今一度考えさせられる思いになりました...

そこに横から出てきたのが浮羽町の若大将ではなくて、赤大将こと、國武

君である。そうばい、関コミのみんなのパワーには負けちよられんバイ・・。福岡の社協マンもみんな負けんごつかないかんバイ、いっそんなこつ関西に旋風を吹き荒れるや・・と一人で盛り上がっていました。

(この内容は浮羽町の赤大将國武君より報告があると思いますので後でお読みください。)

次に、大阪府立大学福祉学部専任講師 藤井博志先生とお会いすることが出来これまたラッキーでした。色々なお話をする中で、地区社協会長、役員の方々に地域福祉についてなかなか理解が、進まない、のですがという問いに、先生いわく、「地区社協、ネットワーク委員、福祉委員制度の母体となる組織づくりは、地域福祉や福祉ニーズを集約するてんにおいても非常に大切な部分であり、その組織体があるのと無いのでは大きく違ってくる」と。

それには、研修、視察、勉強会と色々あるでしょうが何よりも、地域住民の福祉活動とは何かを考えて、何度も、何度も勉強して行く事が必要だし、意味の無い研修だったら、しない方がまし。地域住民にしても本音で社協ワーカーがぶち当たれば必ず答えは帰ってくるはず、最後に社協ワーカーは夢を持って地域に飛び込んで行けという言葉はとても印象的でした。(有難うございました)

今回の「全国社協職員のつどい」では、これはほんの一部の報告ですが、

全国の社協ワーカーの皆さんから元気と、パワーを頂き元気づけられました。そして、京都市A区社協、村井さんの「段取り八分」のお話しとても勉強になりました。新任ワーカーの同窓会など、まだまだ、報告したいのですが紙面の関係上これで終わりたいと思います。

(浮羽町の國武君、来年もまた、パワーと元気をもらいに大阪いこうな・・)



2月9日関西コミュニティワーカー協会主催「全国社協職員のつどい」に予備知識もなく何もわからないまま大阪に行ってきました。

「つどい」の時間が短く、スケジュールもびっしりと詰まっていたこともありゆっくり話をすることは出来ませんでした。いい刺激をもらって帰ってきました。

私自身、知識も経験もなく毎日が手探りの状態ですが、同じように全国で頑張っている人達がたくさんいること。皆さんが地域に根づいた活動を目指していること。一番の収穫は、関西の皆さんの元気のよさでしょうか。ただ、

元気というわけではなく一人一人が何かしら目的意識をもっていることが伝わってきましたし、年齢を問わず上下関係・横の繋がりが強く関西の結束力のよさを見せ付けられました。

社協は、その土地・地域の色が出るため、運営や考え方もさまざまであり、業務の内容も異なるようです。しかし、「地域を少しでも良くしていく」という志は同じです。

「自分の地域のことだけ」と考えていた私にとっては、もっと広い視野をもつて取り組んで行かなくてはならないことを確認しました。それに、同じ考えを持っている人たちが全国にいるのは心強いことです。

今回の「つどい」で印象に残った言葉が2つあります。「バカになろう。」と「出る釘は打たれる。出すぎた釘は打たれない。出ない釘は腐れる。」です。この言葉を忘れず「出すぎた釘」になるように、バカになれるときにバカになれるように前向きに取り組んでいきたいです。

普段の業務で近隣の社協の方と会う機会もあまりなく、そう考えると全国の社協の方と会う機会に恵まれたことは帰ってきた今だからこそ貴重な経験であったと思います。

来年も参加したいと思っていますが、その時には福岡(九州)パワーを関西に見せ付けることが出来るようになればと思います。



私が参加したのは新人ワーカーを対象とした第3分科。4、5人のグループに分かれ、①社協に入って感じたギャップ・不安・不満②今、頑張っていること③仕事の中で一番励まされたこと④社協でチャレンジしたいことを挙げて行くことから始まりました。

地域性や業務内容は多少異なっても、感じたり考えたりする事は共通しているものが多く、何も関西のワーカーのみが特別な事をやっているのではないと感じました。

ただ、私に?福岡に?ないものはワーカー同士のつながりでしょうか。日頃の住民の方との会話に似た、町村社協、府県社協の域、また経験年数を超えたワーカー同士の盛んな会話がとても新鮮で、うらやましく感じました。会議や研修会で県内のワーカーの方とお会いする機会はあるのですが、挨拶程度の会話で満足していました。あと違いと言えば、発想です。会議で発言したり質問したりするのはごく一部の人だけで、その人達だけが参加していて、大半の人が受け身でただその場にいるだけになります。

分科会も基礎講座に参加し、つどい自体の雰囲気味わい、関西のワーカーの強い連帯感を見せつけられ、「関西の社協はいいなー、福岡もこんなになるといいなー」と思いながら帰ってきたのを記憶している。

福岡県でも「社協職員をつどい」が始まり、実行委員も二回経験させていたのだが、率直な意見として「その場かぎり」になつていないだろうか。「つどいを開催することが目的」になつていないだろうか。実行委員を経験された方々にも、もう一度考えていただきたい。

県地職連の事業は、「コミ研」「つどい」「まなこ」の大ききは三つの事業を行っている。「コミ研」は、毎月第三土曜日午後10時にユニティワークに係る様々な題材を基に、喧々囂々意見交換を行い、参加者各自は地元で有効なエッセンスを還元する。

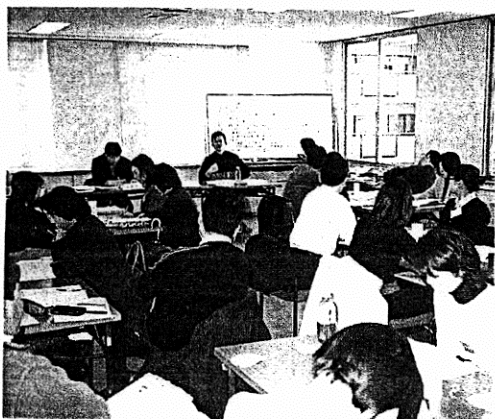
「つどい」は、今までコミ研で取り上げたテーマを題材に、総合的な学習(語らい)の場を設け、地域活動職員のみならず、現場の職員や管理職なども含めて、お互いの立場を越え「社協」の話をします。

「まなこ」は、これら研修機会に残念ながら参加できなかった方々、また福岡県内外の関係の方々に状況を頂いていただき、第三者としてご意見を頂くという仕組みになつており、三事業が連携を持ちながら進んでいく必要があ

あった。

しかし現実には、役員ですら自分の担当事業以外、「内容がよく分からない」という方もおられる状況であり、その辺の温度差から、みんなが総合的に関わっていく「連携」の弱さや、みんなが主體的に盛り上がりつついく「熱意」が、関コミと比較するとあまり感じられない。

「比較するもんじゃな」と批判的に観る方もいるかも知れないが、どうしても関コミと比較せざるを得なく



らい、参加者みんなが「熱い」んだから。(経験もせずにごう言うより、まず、このつどいに行つてみてよ!)だからこそ、「全国のつどい」に参加した時には、関西のワーカー諸氏の、「強い連帯意識」や「個々の個性ある想い」に共感させられ、自分に向けて発せられる「熱い追い風」を強く感じる。

この「風」を受けた自分としては、我が故郷「福岡」「九州」に同じような風が吹くことを強く望むし、逆に全国に向けて「熱い熱い九州・福岡」のもとと熱い風を送りかえしたい。

「全国社協職員をつどい」と言うけれど、実質は過去9回関西の社協ワーカーが企画運営に専心していただき、我々はいつも「お客様」である。この現状を「おかしい」と思わないといけないと思う。

全国と言うからには、それこそ全国各地の社協ワーカーが、企画段階から言いたい放題意見を出しながら関わり、地域性や問題の相違などを検討しつつ、本来の「全国」のつどいに育てていかなければ、今まで我々お客様で来させていただいていた「恩返し」が出来ない。

というより「関西人」だけに、この企画運営のプロセスを独り占めされる事が、もったいなくてたまらない。「九州人」だって熱いのだ!「中・四国人」「関東人」「東北人」...だって同じ事。

編集後記

今回は一〇回とちょうど節目のつどいなので、この機に日本全国津々浦々のあちこちから吹く「熱い風」を「熱いうねり」に変えていきたい。

これを読んだ方、一緒にやりましょう! 連絡下さい!

「まなこ」担当の一年間が終わり、ホッとしています。日頃思い悩むことがあります。

介護保険導入後、社協が運営体から経営体へと変わり、社協活動の根幹であるはずのユニティワーカーが介護保険業務との兼ね合いで、どうしても本来の活動や業務に対して、じつくり腰を据えられない状況ではなくなっている(必要性が弱くなっている)のではないのでしょうか。

しかし、そのような現状だからこそ、地職連の事業である毎月実施の「ユニティワーク実践研究会」や年一回県社協と共催で行う「社協職員をつどい」には多数参加していただき、また、機関誌「まなこ」にも多く投稿していただき、そしてこれらの事業がみなさんの「交流の場」となれますよう、今後とも、みなさんのご協力をお願いいたします。